

投稿**アイヌのプレアデス星団についての伝承****～その多様性を考える～**

北尾浩一（星の伝承研究室）

1. はじめに

星や月の伝承をプラネタリウム投影等に取り上げるとき、特定の文献等に掲載されているひとつのパターンの伝承に基づくのではなく、伝承の多様性に留意することが重要である。伝承、文化は固定されたものではなく、語られる地域、語る人、語るときによって多様に変化していくことを忘れてはならない。

本稿では、アイヌのプレアデス星団についての伝承の多様性について考える。伝承の多様性については拙著『日本の星名事典』において、徳蔵の伝承即ち「北極星が動く」という伝承を事例に論じたことがある。[1] ひとりひとりがそれぞれの地域で語り伝えたからこそ、伝承の多様性が形成された。アイヌのプレアデス星団についての伝承についても、可能な限り多くの伝承事例をもとに考えていきたい。

2. 葛野辰次郎氏による伝承事例**2.1 葛野辰次郎氏のノート**

プレアデス星団の伝承について、葛野辰次郎氏のノートが存在していることを『神の語り神互いに話しあう』によって知った。[2]

『神の語り神互いに話しあう』の凡例には、「葛野辰次郎さんのノート原文を出来る限り生かすよう努めたが、一部漢字をひらがな、ひらがなを漢字に改めたところもある。意識が欠けたところ是一部補ってある」とあり、元のノート原文を見る必要性を感じた。

2.2 葛野次雄氏、葛野大喜氏を訪問

葛野辰次郎氏は明治 43 年（1910 年）、静内町トイベツ（現 新ひだか町東別）に生まれた。しかし、平成 14 年（2002 年）、逝去

された。2024 年 7 月、葛野次雄氏が父葛野辰次郎氏から伝え聞いている星名伝承がないか、電話で確認した。葛野辰次郎氏のノートは辰次郎氏の孫、葛野大喜氏（北海道大学博士課程）が研究のため保管されていることがわかった。プレアデス星団即ちトイタサオウツノチュウについてのノートの該当箇所を見せてほしいという依頼をして 2024 年 8 月 15 日、北海道日高郡新ひだか町静内東別の葛野次雄氏、葛野大喜氏を訪ねた。

2.3 二種類の記述

プレアデス星団の伝承についてのノートには、次の二種類があった。

(1) 葛野辰次郎氏のノート 1

昭和 41（1966）年 10 月 6 日の記述。「といた、さをっの(ウポポ)歌」と明記されていた。葛野辰次郎氏によると、次のように畑を耕すときに歌う労働歌である。

・といたさをっ、の歌をうたいながら、畑たがやし 又供小（北尾注 小供？）にも聞かし働き者は食べうると申しながらとの事です。此のトイタサヲッは畑たがやし稔となる間、出ない星です。それでフチ達（トイタサヲッ）と星に名付、其の星シサム方供養星と申す。

「シサム方供養星と申す」とあるが、和人は九曜星と呼んでいたという意味である。江戸時代の方言辞書『物類称呼』に、「東国にて〇九よりの星と云」と登場する。[3] 内田武志氏によると、クヨーボシが青森県下北郡田名部町（現 むつ市）、山口県大島郡白木村（現 周防大島町）に伝えられている。[4] 北尾も岡山県白石島で記録しており、西日本にも伝えられている。

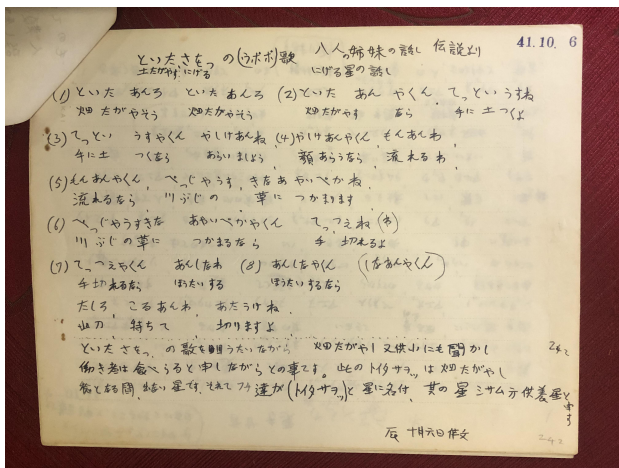


図1 葛野辰次郎氏ノート1(今野利秋氏撮影)

(2) 葛野辰次郎氏のノート2

昭和54(1979)年4月23日の記述。ノート1にあった「(ウポポ)歌」と「といたさをっ、の歌をうたいながら、畑たがやし…」という記述が見られない。

ノート2には、最後に記述した日の天候等について明記している。

トイタ	エイ	トランネ、
畠けたがやす	のを	きらう

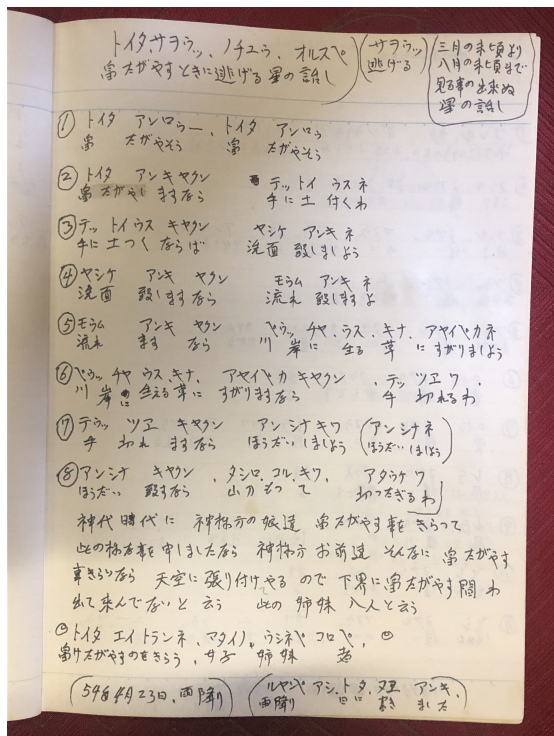


図2 葛野辰次郎氏ノート2(今野利秋氏撮影)

マタイノ	ウシネペ	コロペ、
女子	姉妹	者
ルヤンペ	アシ	トタ
雨	降り	日に
アンキ、		書き
ました	(昭和54年4月23日 雨降り)	

2.4 ノートと『神の語り神互いに話しあう』の比較

葛野辰次郎氏のノート1、2と『神の語り神互いに話しあう』を比較した。(表1) 伝承の内容はほぼ同じであるが、星名がノート1の「トイタサウツ」に比べて、ノート2の場合は「トイタサウツノチュウ」と「ノチュウ」(星)を加えてに記されている。実際は、暮らしのなかで「トイタサウツ」と「ノチュウ」を加えないで語られたと思われる。

3. プレアデス星団の伝承の多様性

次の伝承事例との比較を行なった。(表2)
・膽振有珠アイヌの口誦[5] ・静内、葛野辰次郎氏[6] ・釧路屈斜路、猪狩ノクマ氏[7] ・旭川、川村ムイサシマツ氏[8] ・有珠郡有珠村、ニ・ヨッテキ氏[9] ・宮本ヌマテ姫、栗山国四郎氏(旭川近文): 末岡外美夫氏による[10][11]

3.1 伝承の登場人物

次の二つのケースがある。

- ・娘のうちの一人が助言、他の娘たちが反論
- ・男(若者、神様方)が助言、娘たちが反論

3.2 星名の比較

次のように、多様な星名が語られている。

- ・数にもとづくもの(6): イワンノチュウ、ユワン・ノチュウ
- ・数にもとづくもの(7): アルワンノチュウ、
- ・畑仕事から逃げる: トイタサウツ、トイタサウツノチュウ
- ・怠ける: トランネノチュウ

表1 葛野辰次郎さんのノート比較

タイトル	葛野辰次郎氏のノート1・昭和41(1966)年10月6日		葛野辰次郎氏のノート2・昭和54(1979)年4月23日		葛野辰次郎氏著「神の語り神互いに語りあう」(1983年)
	といた、さをつのめがた歌 土ががやす、にける	八人の姉妹の話し 伝説より にける星の願	トイタ、サブラウツ、ノチュウ、オルスベ (畠たがやすとき逃避る星の話し)	トイタ (畠たがやすとき逃避る星の話し)	トイタ (畠たがやすとき逃避る星の話し)
星名	トイタサブラ		トイタサブラウツノチュウ	トイタサブラウツノチュウ	トイタサブラウツノチュウ
助言1	といた あんろ といた あんろ 畑 たがやそう 畑 たがやそう	といた あんろ といた あんろ 畑 たがやそう 畑 たがやそう	トイタ アンロウー、トイタ アンロウ 畠 たがやそう、畠 たがやそう	トイタ アンロウー トイタ アンロウ 畠 たがやそう 畠 たがやそう。	トイタ アンロウー トイタ アンロウ 畠 たがやそう 畠 たがやそう。
反論1	といた あん やくん、 てつ とい うすね 畑 たがやす なら 手に 土 つくよ	といた あん やくん、 てつ とい うすね 畑 たがやす なら 手に 土 つくよ	トイタ アンキヤクン テツ トイ ウスネ 畠 たがやしますなら 手に 土 付くわ	トイタ アンキ ヤクン テツ トイ ウス ネ 畠 たがやす なら 手に 土 つく わ。	トイタ アンキ ヤクン テツ トイ ウス ネ 畠 たがやす なら 手に 土 つく わ。
助言2	てつ とい うすやくん やしけあんね 手に 土 つくなら あらいましよう	てつ とい うすやくん やしけあんね 手に 土 つくなら あらいましよう	テツ トイ ウス キヤクン ヤシケ アンキネ 手に 土 つく ならば 洗面 致ましよう	テツ トイ ウス キヤクン ヤシケ アンキ ネ 手に 土 つく ならば 洗面 致ま しよう。	テツ トイ ウス キヤクン ヤシケ アンキ ネ 手に 土 つく ならば 洗面 致ま しよう。
反論2	やしけ あん やくん、 ぺつじやくす、 きなあ やいべかぬ 顔 あらう なら、 流れる わ、	やしけ あん やくん、 ぺつじやくす、 きなあ やいべかぬ 顔 あらう なら、 流れる わ、	ヤシケ アンキ ヤクン モウム アンキ ネ 洗面 致します なら 流れ 致します よ	ヤシケ アンキ ヤクン モウム アンキ ネ 洗面 致します なら 流れ 致します よ。	ヤシケ アンキ ヤクン モウム アンキ ネ 洗面 致します なら 流れ 致します よ。
助言3	もんあんやくん、 ぺつじやくす、 きなあ やいべかぬ 流れる なら、 川は(伊達川)はちの、 草 に つかまます	もんあんやくん、 ぺつじやくす、 きなあ やいべかぬ 流れる なら、 川は(伊達川)はちの、 草 に つかまます	モウム アンキ ヤクン ペウツ チャ ウス キナ アヤイペカネ 流れ ます なら 川 岸に 生る 草 に つかましよう	モウム アンキ ヤクン ペウツ チャ ウス キナ アヤイペカネ 流れ ます なら 川 岸に 生る 草 に つかましよう。	モウム アンキ ヤクン ペウツ チャ ウス キナ アヤイペカネ 流れ ます なら 川 岸に 生る 草 に つかましよう。
反論3	ぺつじやくすきな あやいべかやくん てつ、 つえね 川ぶじの草に つかまるなら 手 切れるよ	ぺつじやくすきな あやいべかやくん てつ、 つえね 川ぶじの草に つかまるなら 手 切れるよ	ペウツ チャ ウス、 キナ、 川 岸に 生る 草に アヤイペカ キヤクン テツ ツエ ワ すがります なら 手 切れる わ	ペウツ チャ ウス キナ 川 岸に 生る 草に アヤイペカ キヤクン テツ ツエ ワ すがります なら 手 切れる わ。	ペウツ チャ ウス キナ 川 岸に 生る 草に アヤイペカ キヤクン テツ ツエ ワ すがります なら 手 切れる わ。
助言4	てつ つえやくん あんしなわ 手 切れるなら ほうたいする	てつ つえやくん あんしなわ 手 切れるなら ほうたいする	テウツ ツエ キヤクン アンシナキワ 手 切れ ますなら ほうたいましよう	テツ ツエ キヤクン アンシナ キワ 手が 切れ ますなら ほうたい ましよう。	テツ ツエ キヤクン アンシナ キワ 手が 切れ ますなら ほうたい ましよう。
反論4	あんしなやくん たしろ、 こるあんわ、 あたうけね ほうたいするなら 山刀、 持ちて、 切りますよ	あんしなやくん たしろ、 こるあんわ、 あたうけね ほうたいするなら 山刀、 持ちて、 切りますよ	アンシナ キヤクン タシロ コル キワ アタウケ ワ ほうたい 致すなら 山刀 もつ て 切ったざる わ	アンシナ キヤクン タシロ コル キワ アタウケ ワ ほうたい 致すなら 山刀 もつ て 切ったざる わ。	アンシナ キヤクン タシロ コル キワ アタウケ ワ ほうたい 致すなら 山刀 もつ て 切ったざる わ。
結果	といたさをつ、の歌をうたいながら、畑たがやし、又供小(北尾庄 小供?)にも聞かし働き者は食べうると申しながらとの事です。此 のトイタサブラは畑たがやし稔どなる間、出ない星です。それで フチ達がい(イタサブラ)と星に名付、其の星シサム方供養星と申す	といたさをつ、の歌をうたいながら、畑たがやし、又供小(北尾庄 小供?)にも聞かし働き者は食べうると申しながらとの事です。此 のトイタサブラは畑たがやし稔どなる間、出ない星です。それで フチ達がい(イタサブラ)と星に名付、其の星シサム方供養星と申す	神代時代に、神様方の娘達 畠たがやす事をきらって此の様な事を 申しましたなら、神様方お前達そんなに畠たがやす事をきらいなら天 空に飛び付けてやるので下界に畠たがやす聞わ(ママ)出て来んで ないと云。此の姉妹八人と云。	神代時代に神様方の娘達、畠たがやす事をきらって此の様な事を申し ましたなら、神様方お前達そんなに畠たがやす事をきらいなら、天 空に飛び付けてやるので下界に畠たがやす聞わ(ママ)出て来んで ないと云。此の姉妹八人と云。	神代時代に神様方の娘達、畠たがやす事をきらって此の様な事を申し ましたなら、神様方お前達そんなに畠たがやす事をきらいなら、天 空に飛び付けてやるので下界に畠たがやす聞わ(ママ)出て来んで ないと云。此の姉妹八人と云。

表2 プレアデス星団の伝承の多様性

	星に関するアイヌの傳説(吉田)	葛野辰次郎氏のノート2(静内)	アイヌ民話集(更新利藏)	アイヌ民話集(更新利藏)	アイヌ古事類集(吉田)	アイヌの星(赤羽美夫)	人間遊みた星(赤羽美夫)
話者	膽振有珠アイヌの口誦	静内、葛野辰次郎氏	釧路屈斜路、猪狩ノクマツ氏伝承	旭川、川村ムイサシマツ氏	有珠郡有珠村、ニ・ヨツテキ氏	宮本マサテ(旭川近文) 栗山国四郎氏(旭川近文)	M・M(他(北尾注:おそろく「アイヌの星」と同)
タイトル		トイタ、サワウツ、ノチチュウ、オルスベ(畠たがやすとぎに逃げる星の語)	強情星		六星(ユワン・ノチウ)の昔ばなし		
星名	ユワン・ノチウ	トイタサワウツノチチュウ			ユワン・ノチウ	アルワン・ノチウ、イワン・ノチウ	トランネ・ノチウ、イワン・ノチウ
助言1	男 トイタアンロー (畑をおこしませうね)	神様方 トイタ アンローウ、トイタ アンローウ (畠たがやすう、畠たがやすう)	三人の男 毎日ぶらぶら遊んでばかりいないで、少しは畑でも耕したらどうだ。	末娘 姉は畑をつくるのが嫌いだ、末娘だけはよく働いて、姉達に「畑やるべ」。	他の一人の女 昔、6人の女がいた。5人の女、新しい粟をたべて甘えたい。他の1人の女、それだから働かなくていい。	一人のまじめな若者 毎日ぶらぶら遊んでいないで、畑でも耕したらどうだ。いくら化けでも、怠け娘は嫁のもらい手がないぞ。	一人のまじめな若者 毎日ぶらぶら遊んでいないで、畑でも耕したらどうだ。いくら化けでも、怠け娘は嫁のもらい手がないぞ。
反論1	女 セセキアンワフケ (畑をおこしたら暑いぞらうな)	神様方の娘達 トイタ アンキヤクン (畠たがやすなら) テッ トイ ウスネ (手に土はくわ)	六人の娘 いやなこった、畑なんておこしたらこの綺麗な手きたなくなるヲヨ。	五人の姉 畑なんにかやったら手よごれるわ。	五人の女 すると5人働けば暑いと問答がはじまった。	七人の娘 畠など耕したら暑いぞらうな、手も汚れるよ。	七人の娘 畑など耕したら暑いぞらうな、手も汚れるよ。
助言2	男 セセキアンコ、シュサンコエン (暑くあつたら水浴びたらえいでせう)	神様方 テッ トイ ウス キヤクン (手に土をつくらば) ヤンケ アンキネ (洗面顔、まよ)	三人の男 きたなくなったら、川へ行つて洗ったら、川へ行って洗ったらいいでせう。	末娘 よこれたら川で洗ったらよかべに。	他の一人の女 暑けりや水あびろ。	一人のまじめな若者 汚れたら川で水浴びしたらいいじゃないか。	一人のまじめな若者 汚れたら川で水浴びしたらいいじゃないか。
反論2	女 シュサンコ、モンアムワフケ(水浴びたら流されてひどいぞらう)	娘達 ヤシケ アンキ ヤクン (洗面致しますなら) モウム アンキ ネ(流れ致しますよ)	六人の娘 川なんかで手洗ったら、川へおちて流されるよ。	五人の姉 そんなことしたら川さおちるべ。	五人の女 水あびれば流れる。	七人の娘 水浴びしたら、流されてひどい目にあうから嫌だ。	七人の娘 水浴びしたら、流されてひどい目にあうから嫌だ。
助言3	男 モンアンコ、シュブツキ、シンリチ、アアニ、エアイカブ(流れたら、葦の根、抓んだら、よいでせうよ)	神様方 モウム アンキ ヤクン(流れますなら) ペウツ チャ ウス キナ イペカネ(川岸に生る草にすがりましょう)	三人の男 流されたら、草の葉につかまてあがればいいじゃないか。	末娘 落ちたら柳の木さつかまれ。	他の一人の女 流れたら葦の根にとりつけ。	一人のまじめな若者 流されそうになったら、葦の根につかまればいいじゃないか。	一人のまじめな若者 流されそうになったら、葦の根につかまればいいじゃないか。

反論3	女 シブツキ、シンリチ、アアニコ、テツキ、トウエ、ハウケ(葦の根、抓んだら、手を切るだらうさ)	娘達 ベウツ チャ ウス キナ(川岸に生える草に)アヤイペカ キヤクン(すがりますなら)テツ ツエ ワ(手切れるわ)	六人の娘 とんでもない草の葉になんかつかまったら手がきれるよ。	五人の姉 枝おれで流れる。	五人の女 葦の根にとりついたら手を切る。	七人の娘 手が切れて、痛いよ。	七人の娘 手が切れて、痛いよ。
助言4	男 テツキ、トウエコ、アシナシナ(手が、切れたら、結んだらえいでせう)	神様方 テウツ ツエ キヤクン アンジンナキワ(手切れますなら、ほうだい(ママ)しましょう) (アンシナネほうだいしましょう)	三人の男 手がきれたら、しばったらよかべ。	未娘 流れたら泳いで上げよ。	他の一人の女 手を切ったら、からごけ。	一人のまじめな若者 切れたら布で縛って、手当すればいい。	一人のまじめな若者 切れたら布で縛って、手当すればいい。
反論4	女 アシナシナコ、タシラキ、タシラキワケ(手を結んでも胸が、どきどきときて苦しいわ)	娘達 アンジンナ キヤクン(ほうだい 致すなら)タシロ コル キワ(山刀もって)アタウケ ワ(切ったぎるわ)	六人の娘 傷をしばっても、胸がどきどきしてせつないよ。	五人の姉 星になればだまっていれていずな。	五人の女 からごえたら痛い。	七人の娘 傷を縛っても、胸がどきどきして、せつないよ。ああ、星になれないよ。星なら何しなないでいだらうからね。	七人の娘 傷を縛っても、胸がどきどきして、せつないよ。ああ、星になれないよ。星なら何しなないでいだらうからね。
助言5					他の一人の女 痛けりやほごせ。		
反論5					五人の女 ほごしたら、風がはいると。		
結果		神代時代に、神様方の娘達 畠たがやす事をきらって此の様な事を申しましたなら、神様方お前達そんなに畠たがやす事きらいなら天空に張り付けてやるので下界に畠たがやす間わ(ママ)出て来んでないと云う。此の姉妹八人と云う。	この強情者！三人の男は怒って女たちを責めた。(中略)今でもすばる星は輝いている。夏の闇がくぐり、冬になって畑が終ると東の空に現われてくる。そして、それを追ってオリオン三星が空のこのぼってくるのは、強情者の女と、それを追う三人兄弟の姿	神様この姉妹を星にした。畑いまだから冬でないとい出てこない。	どうとう六人ながら六星に化した。このような怠け者だから、ちやうど今時分の畑仕事にこの星は、ここに出ない。また秋入がすすんでから、出てやっと思えるのである。	星になった七人の娘はアルワンノチャと呼ばれ、畑仕事の終わった秋の終り頃を寒い冬空に輝くようになったが、七人の娘のうち一番下の娘は自分の行ないを恥じて、両手で顔を蔽ってしまった。(中略)イワンノチャ(六つ星)というよりは、ずっと後になってできたものだ。	星になった七人の娘はアルワンノチャと呼ばれ、アイヌモシの畑仕事が終わる頃には、天に昇って、寒い冬空に輝くようになった。七人の娘のうち、一番下の娘は自分の行ないを恥じて、両手で顔を蔽ってしまった。(中略)イワンノチャ(六つ星)というよりは、ずっと後になってできたものだ。

3.3 助言 1 の比較

畑仕事をするように助言している点は共通。

3.4 反論 1 の比較

畑仕事をする「土が付く、汚れる」「暑い」「汚れると暑い両方」に分類できる。

3.5 助言 2 の比較

「水浴び」「洗う」の二通りに分類できる。

3.6 反論 2 の比較

一例のみ「川に落ちる」のみで、「流れる」がない。他は「流れる。流される」。

3.7 助言 3 の比較

つかまれば（抓む、すがる）よい点は共通。つかまるのは、「草」「葦」「柳」のように異なる。

3.8 反論 3 の比較

助言 3 の柳の木につかまるに対する反論のみ「枝おれて流れる」である。他は手を切る（手が切れる）。

3.9 助言 4 の比較

布で縛ったり等を助言するが、「枝おれて流れる」に対してのみ「流れたら泳いで上ればよい」と助言。

3.10 反論 4 の比較

反論 4 には次のような多様性がある。

- ・（縛っても、手を結んでも）胸がドキドキしてせつない（苦しい）。
- ・星になればだまっていれていい。
- ・胸がドキドキしてせつない+星になれば何もしなくてよい。
- ・山刀もって切ったぎるわ。

3.11 結果の比較

結果には、次のような多様性がある。

- ・畑を耕すことがきらいなため、天空に張り付けられ、畑耕す季節は出て来ない。姉妹 8 人、星の数は 8 つ。
- ・オリオン三つ星（三人の男）が怒って女たち（プレアデス星団）を追いかけた。
- ・七人の娘のうち一番下の娘は自分の行ないを恥じて、両手で顔を蔽うてしまった。

4. 北斗七星を意味するケース

プレアデス星団でなく、北斗七星を意味する伝承事例がある。

萱野茂氏は、トイタサオツ（toyta-saot）について、「北斗七星」と記している。北斗七星は畑仕事のはじまる時期、即ち 5 月下旬から 6 月上旬の日没後は、頭の上に高度を上げている。高度を上げている様子を萱野茂氏は、「畑時季になるとずうっと上へ逃げるのでそう言われるのだ」と記している。畑仕事が嫌で高度を上げて逃げたが故にトイタサオツと呼んだのである。[12]

また、末岡外美夫氏によると、トイタクル・サオツ・ノチウは、北斗七星のなかで 3 等星である δ 星を除く六星（ α 、 β 、 γ 、 ϵ 、 ζ 、 η ）を意味する。次のようにプレアデス星団を意味するトイタサオツとは異なる伝承が伝えられていた。[13]

- ・八雲の浜から山に入ったコタンに七人姉妹が住んでいた。
- ・母親一人の手で娘たちを育ててきた。
- ・母親は病気に伏して、働き手は七人の娘たちだけになってしまった。
- ・七人の娘たちは家から出て働こうとはしなかった。母親が苦勞して播いた粟や稗はすっかりと枯れてしまった。
- ・その様子を見ていた首長は二人の息子を娘たちのところへ使いにやったが追い返された。
- ・首長は、穀物の祭場のカムイに祈りを奉げた。六日の間の祈りが通じたのか、祭場からタンネカムイ（蛇）が出てきた。
- ・その夜、娘たちの住むチセ（家）の戸口からタンネカムイ（蛇）が入ってきた。
- ・炉端の周囲をまわるとに大きくなっていくタンネカムイ（蛇）に、娘たちは恐ろしさのあまり外にかけ出した。
- ・大蛇に成長したタンネカムイはりゅう座となり、娘たちは北斗七星となった、
- ・おおぐま座 δ 星は、「許して」と顔を隠した

末娘で3等星として暗く輝く。アルコルは背負われている母親である。

5. おわりに

アイヌの人びとの暮らしのなかで語り伝えられた星名伝承に関心を持ったのは、末岡外美夫氏著『アイヌの星』の出版される前であった。[14] [15] [16] しかしながら、1978年から星の和名伝承調査を開始し、アイヌの星名伝承について長い中断をしてしまった。

いま、日本列島全体の星名伝承を理解しようとして取り組んでいるが、その際にアイヌの人びとが語り伝えた天体に対する多様で豊かな星名伝承を出発点として考える必要性を感じている。

星名伝承を語り伝えられた時間軸、空間軸で形成された星の文化の多様性について、今後も星と暮らしたひとりひとりの生活現場から考えていきたい。

本調査にあたって、葛野次雄氏、葛野大喜氏に助言をいただいた。紙面を借りてお礼を申し上げます。



(2024年8月15日、葛野次雄さんを訪問。左から山田将俊、葛野次雄、北尾浩一、古屋昌美、今野利秋)

文 献

[1]北尾浩一(2018)『日本の星名事典』, 原書房, pp.289-297.

[2]葛野辰次郎(1983)『神の語り神互いに話しあう』, オホーツク文化資料館, pp.5-7. pp.10-12.

[3]越谷吾山(1775)『物類称呼』

[4]内田武志(1949)『日本星座方言資料』, 日本常民文化研究所, p.79.

[5]吉田巖(1911)「星に関するアイヌの傳説」, 人類学雑誌, 27(7): 396 - 401.

[6]葛野辰次郎氏のノート2(1979)

[7]更科源蔵(1970)『アイヌ民話集(増補改訂版)』, 北書房, pp.186-187.

[8]同上, p. 187.

[9]吉田巖(1957)『愛郷譚叢 アイヌ古事風土記資料 帯広市社会教育叢書 No.3』, 帯広市教育委員会, p.24.

[10]末岡外美夫(1979)『アイヌの星』, 旭川振興公社, pp.200-202.

[11]末岡外美夫(2009)『人間達(アイヌタリ)のみた星座と伝承』, pp.510-514.

[12]萱野茂(2002)『萱野茂のアイヌ語辞典増補版』三省堂, p.326.

[13]末岡(2009), 前掲書, pp.229-232.

[14]北尾浩一(1976)「アイヌの星の記録」武田みさ子編『星の歳時記』, pp.214-217.

[15]北尾浩一(1976)「北の天文学」, てんぶんがく, 22: 53-59.

[16]北尾浩一(1976)「アイヌの天文学」, STARS&GALAXIES, 2(6): 1-6.



北尾 浩一

(上の写真は、宮城県気仙沼市大島にて、比嘉義裕氏撮影)